

「道徳の授業をしても子供は変わらない」って本当か？

～小金井市立東小学校の道徳～

後藤 忠 2019.04

今から6年前のことですが、前任の中川裕子校長先生から校内研究の講師依頼を受けました。

「どの学年も大なり小なり**集中力や落ち着きに欠ける、児童同士のトラブルがよく起きる、集団生活の規律や秩序の維持が難しい**などの悩みを抱えています。そして、**学級経営に困難**をきたしている学級が複数あり、教員は大変疲れています。初任7年未満の教員が7割という状況です。

一方、学区は大変落ち着いたところで、多くの保護者は学校に対してとても協力的です。

次年度から道徳教育に力を入れて児童の健全育成に努め、秩序ある明るい学校を作っていきたいと思っておりますので、どうぞよろしくご指導ください。」というものでした。

私は丁重にお断りしました。

「申し訳ありません、道徳授業では子供の生活(指導)上の問題は解決しません。道徳授業は子供の10年後、20年後に向けて種を蒔くような気の長いことをする授業です。しかも、せっかく蒔いても芽が出ないかもしれませんし、花は咲かないかもしれません。しかし、『蒔かぬ種は生えぬ』ので、種は蒔き続けなければなりません。それが教師の仕事だからです。芽を出したり、花を咲かせたりするのは子供の仕事です。子供の仕事に教師は立ち入れませんし、立ち入ってはいけません。」

生活指導上の課題(問題)を解決するなら、特別活動の学級活動を中心に研究に取り組まれた方がずっと実効性はあると思います。」

すると、校長先生は「分かりました。それでよいのでお願いします」とおっしゃるので、お引き受けしました。

その際、校長先生に次の3点を先生達に周知徹底して下さるようお願いしました。

- ① 道徳授業は児童の行為・行動を是正し、児童の生活指導上の問題を解決するために行う授業ではないので、絶対にそのことを期待しないこと。
 - ② 「指導したことは身に付かない」と思っていること。
 - ③ 授業で「道徳を教えよう、分からせよう」とせず、ひたすら「待つ、聴く、受け止める」姿勢を貫くこと。
- こうして東小学校の道徳授業研究は始まりました。

先生達は上手な授業に色目を使わず、「よい授業」を求めてひたすら懸命に取り組みました。

初年度は「教材選択」と「教材提示」、それに「(教師の)自己開示」を授業の最優先課題にしました。

そうして1年経った頃、養護教諭の浅野先生が校長先生に話したそうです。

「校長先生、最近保健室の雰囲気が少し変わってきました。イライラ、カサカサした空気がなくなってきて、何んだかしっとりしてきた感じです…。」

道徳の授業を重ねることによって子供の内面は少しずつ変わる…、それには訳があるのです。

子供は毎週、内容項目(道徳的価値)を変えながら、

- * その価値のよさや大切さをより深く理解(自覚)し、
 - * その価値は大切だと分かっている、なかなか実現できない弱さが自分にあることを理解し、
 - * その価値を実現したり、できなかったりした時の感じ方や受け止め方が人によって違うことを理解し、
- そうした理解を基に、自己を見つめ、自己の生き方についての考えを徐々に深めていきます。

すると、「自己を見つめる」習慣が自然に身に付いてきて、自分を棚に上げて人を責め(攻撃)するようなことはしなくなってきました。

今、東小は不破淳一校長先生に引き継がれ、その頃の先生達の2/3は異動しました。また、校内研究も社会科に変わり、先生達は熱心に社会科の研究に取り組んでいます。(なお、昨年度の都小社の研究発表会は2/22(金)に東小で行われました。)

一方、「児童に自信と誇りを！」と取り組んできた道徳の実践は地道に継続され、今や学校はすっかり変わりました。道徳の研究に取り組んだ年の1年生が今の6年生です。彼らは道徳の学習の仕方をよく身に付けています。そして、深く自己を見つめます。それには6年かかるのです。

「道徳科授業」の実効性の有無は、授業の地道な積み重ねから問われるべきものだと思います。

いずれにしても、未だに自己を深く見つめられないでいる大人を見るたびに、彼らが育った「道徳の時間」不毛時代の学校教育をつくづく残念に思います…。